B-7

沖縄語の形態格：依存格理論による分析

吉本　靖（琉球大学）

【要旨】本発表では沖縄語の格配列に関して生成文法の依存格理論（Marantz 1991, Baker 2015）による分析が有効であることを主張する。まず，沖縄語が言語類型論的には有標主格（marked nominative）タイプに属することを確認する。次に， Baker (2015)の依存格付与分析を基に，沖縄語の主格・対格・与格がどのように付与されるかを考察する。沖縄語の与格は（少なくとも一部は）固有格であると分析され，音形をもたない対格は，無標格であると分析できる。依存格理論による分析の有効性は，主格の分析において特に示される。沖縄語は有標主格言語であるため，主語には依存格である有標主格が付与される。このことから，沖縄語では連体修飾機能を持つ名詞句も主格と同じ格で標示されることが説明可能になる。また，非定形節の主語が主格標示されることは，一致による格付与理論では問題であるが，依存格理論では問題ではないことも示す。

1. 有標主格言語の特徴を示す沖縄語

分析の出発点として，沖縄語が言語類型論的には有標主格（marked nominative）タイプに属することを確認する。Comrie（2005）や König（2009）によると有標主格言語の特徴は，主格は形態的に標示されるが対格は形態的に標示されない（すなわちゼロ形態である）ということである。沖縄語がこの特徴を持つことは（1）のような例文で確認できる。（日本語と異なり，（1）では目的語の助詞が省略されているのではなく，その助詞自体が存在しない。）例文（2）は，助詞「ヌ」も主格を標示することを示している。（本稿の例文は全て内間・野原（2006）または宮良（2000）からの引用である。）

（1）タラー-ガ　クヌシムチ-Ø　カチャン。
　　太良-主格　この本-対格　　書いた
「彼がこの本を書いた。」

（2）ハブ-ヌ　ウゥン。
　　ハブ-主格　いる
「ハブがいる。」

「ガ」と「ヌ」の使い分けの基準については諸説あるが，内間（2011）は，那覇方言においては身近にとらえた対象には「ガ」がつき，客観的にとらえた対象には「ヌ」がつくのが基本であると述べている。ただし，内間はさらに，主格用法の「ガ」は「ヌ」の領域まで深く入り込んでいると述べており，「ヌ」と「ガ」のどちらを使用してもいい例が数多くあげられている。

2. 依存格理論による沖縄語の主語と目的語の形態格分析

現行の生成文法理論では格付与のメカニズムとして様々な分析が提案されているが，代表的なものとしては，時制辞などの機能範疇にある素性と DP にある素性との一致により格が与えられるとする分析と，格の具現化に関する離接的なヒエラルキーを仮定して，一部の格は特定領域内の他の NP に依存して与えられるとする分析がある。前者は抽象格に関する分析で後者は形態格（実際に形態的に具現される格）に関する分析であるという違いがあるが，日本語や沖縄語のように格が形態的に明示される言語においては，後者の分析がどの程度成功するのかを研究する価値があるだろう。本稿では，便宜上，後者の分析を依存格理論によ

る分析と呼ぶことにする。日本語に関しては，青柳（2006）や加賀（2017）による依存格理論による分析が存在するが，沖縄語を始め琉球諸語の格体系を依存格理論の観点から分析した研究は，筆者の知る限りまだない。依存格理論を最初に提唱したのは Marantz (1991)であるが，それをさらに洗練されたものにしたのは Baker (2015)である。本研究では Baker (2015)の枠組みを採用して沖縄語の格体系を分析し，依存格理論の有効性について検討する。

まず，依存格理論で沖縄語の基本的な格である主格・対格・与格がどのように付与されるか考えてみよう。（沖縄語の属格は主格と同じ形態，すなわち「ガ」または「ヌ」で標示されるため，Shimoji (2012)はこれらをまとめて nominative-genitive case と呼ぶほうがいいと指摘している。「ガ」または「ヌ」の属格用法については 3 節で分析する。）Marantz (1991)の提案した「格具現化に関する離接的ヒエラルキー」には（３）に示すように４種類の格がある。

（３） a. 固有格（lexically governed case）
b. 依存格（dependent case）
c. 無標格（unmarked case）
d. デフォルト格（default case）

格付与操作を行うとき，まずはヒエラルキー上，上の格から付与が可能かどうかチェックする。一番上にある固有格が与えられない場合，次は依存格が付与できるかを見て，それもできない場合は無標格が与えられるか見てみる，というように付与が可能な種類の格にたどり着くまでチェックを続け，可能になった時点で格付与を行うしくみである。

沖縄語の固有格としては，日本語の「ニ」に相当する助詞「ンカイ」や「ナカイ」などが考えられる。目的語にこれらの格助詞を要求する動詞は決まっており，（４）に例示した「イチャイン」（会う）や「ナラースン」（教える）などである。

（４） a. アリ-ンカイ イチャタン。
彼-与格 会った
「彼に会った。」

b. ッヤー-ンカイ ナラースン。
君-与格 教える
「君に教える。」

日本語を依存格理論の枠組みで分析した青柳（2006）は，与格の「ニ」は固有格であると分析しており，加賀（2017）は「ニ」は固有格である場合とそうでない場合があるという分析を提示している。沖縄語の「ンカイ」／「ナカイ」等に固有格以外の分析をすべき性質があるかどうかについては本稿では立ち入らず，（４）の「ンカイ」は固有格であると仮定する。そうすると（４）の目的語 NP はそれを選択する動詞の特性により，（３）のヒエラルキーで一番上の固有格を付与されることになる。

日本語と沖縄語で顕著に異なるのは，（３b）の依存格である。日本語では青柳（2006）が対格の「ヲ」は依存格であるとする分析を提示している。青柳（2006）は Baker (2015)に先立ち，依存格の付与には c 統御関係が関与しているとし，（５）に示す対格付与規則を提示している。

（５） 対格の o は，最小の時制文において，別の無標の名詞句に c 統御される無標の名詞句に対して付与される。

これは Baker (2015)による Marantz (1991)のアイディアの更新版における依存格付与規則と基本的に同じ規則である。日本語とは対照的に，有標主格言語である沖縄語では，主格が依存格であると考えられる。このことを検証するために，まず Baker (2015)による有標主格（marked nominative）の付与規則を見てみよう。

（６） Assign NP1 *marked nominative* if there is no other NP, NP2, in the same domain WP as NP1 such that NP2 c-commands NP1.

（６）における WP は，基本的に Chomsky (2000, 2001)のフェイズ理論におけるスペルアウト領域を指している。例文（１）と（２）では，CP フェイズのスペルアウト領域である TP の中で，主語名詞句は他の名詞句に c 統御されていない。（１）では，TP 中に目的語「クヌシムチ」（この本）があるが，それは主語 NP「タラー」（太良）を c 統御しないため，（６）により主語 NP に主格助詞の「ガ」が付与されることが説明される。（２）は自動詞文であるため，TP 内に主語を c 統御する他の NP は存在しない。したがってこの文でも主語に主格助詞が付与されることになる。

ここで，もう一つのフェイズである vP のスペルアウト領域である VP 中の目的語にも有標主格が与えられるのではないかという疑問が生じるかもしれない。例えば，（１）の目的語「クヌシムチ」は VP の中にあるはずで，その領域内で（６）を適用すると，事実に反して主格の付与された「クヌシムチ-｛ガ／ヌ｝」ができてしまう。この問題については，Baker (2015: 153) が有標主格言語のチョクトー語（Choctaw）やマリコパ語（Maricopa）の目的語の格に関する議論で提案している簡単な解決法をここでも採用する。その解決法とは，これらの言語においては（６）の規則は TP レベルで適用され，VP レベルでは適用されないと規定することである。単なる規定ではあるが，格付与規則のパラメータの中にこのような選択肢があってもおかしくはないだろう。

次に沖縄語の，音形を持たない対格について考えてみよう。この格は，格の具現化に関するヒエラルキー（３）のどの段階で与えられる格であろうか。可能性として考えられるのは，（３c）の無標格か（３d）のデフォルト格である。無標格とは，Marantz によると統語環境に影響を受ける格のことで，（３d）のデフォルト格とは，他の格具現化規則が適用できない場合に与えられる格である。本稿では，Baker による有標主格言語の分析にならい，沖縄語の音形をもたない対格は無標格であると仮定する。そうすると，例文（１）の目的語「クヌシムチ」は，固有格も与えられず，依存格付与規則（６）の適用も受けないため，次の選択肢である無標格（ここではゼロ格）を付与されることになる。

以上，沖縄語の基本的な格（主格，対格，与格）が依存格理論でどのように付与されるかを見てきた。次節以降では，この依存格理論による分析の有効性をいくつかの言語事実に基づき，示していきたい。

3. 連体修飾機能を持つ名詞句に付与される有標主格

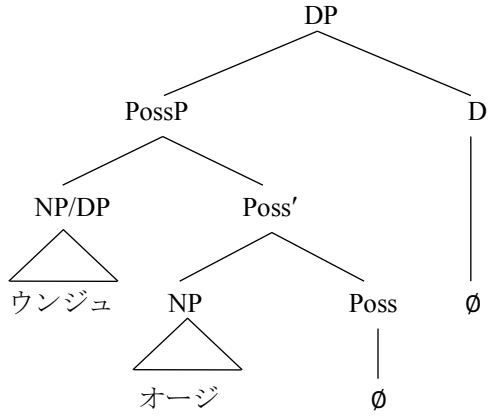
沖縄語の格配列に関して依存格理論による分析が有効であることを示す事実の１つ目は，連体修飾の機能を持つ名詞句の格標示が（６）の有標主格付与規則により説明できることである。（７），（８）に示す通り，沖縄語では連体修飾機能を持つ名詞句は主格と同じ「ガ」または「ヌ」によって標示され，属格の「ノ」で標示される現代日本語とは異なる。

（７）[$_{DP}$ [$_{PossP}$ [$_{NP/DP}$ ウンジュ]-ガ　[$_{NP}$ オージ] ∅] ∅]
あなた-主格　　扇
「あなたの扇」

（８）キー-ヌ　ファー
木-主格　　葉
「木の葉」

例（７）の樹形図を（９）に示す。

（９）



（９）では DP がフェイズであり，D の補部にある Possessive Phrase（PossP, 所有句）がスペルアウトされる。このスペルアウト領域の中には，まだ格を与えられていない NP が２つあり，最初の NP「ウンジュ」（あなた）は，もう１つの NP「オージ」（扇）により c 統御されていない。したがって，（６）により，有標主格が「ウンジュ」に与えられる。例（８）も同様に，DP のスペルアウト領域の中で「キー」（木）は他の NP に c 統御されていないため，有標主格のもう１つの形である「ヌ」が「キー」に付与されると分析できる。日本語については，青柳（2006: 64-5）が属格の「ノ」は無標格であることを提案しているが，沖縄語では連体修飾機能を持つ名詞句は，節の中の主語と同じように，依存格である有標主格が与えられると言える。

なお，（９）において２番目の NP は沖縄語の無標格である対格を与えられるのであろうかという疑問が生じるであろう。沖縄語の対格はゼロ格であるため，仮に対格を与えられているとしても，（９）の例は説明可能である。しかし，Baker は対格言語（＝依存格として対格を与えられる日本語のような言語）の所有句を含む DP 中の所有されている名詞句（possessum）の格を見てみると，対格が付与されている例はないことから，possessum には対格は付与されていないとしている。（その結果を導く分析に関しては，Baker (2015: §4.4.3.2) を参照。）このことからすると，（９）においても possessum NP「オージ」は無標の対格を与えられていないと考えられる。

4. 非定形節の主語について

依存格理論による格付与分析を支持する２つ目の言語事実は，（１０）に例示したように非定形節の中の主語にも主格が与えられることである。

（１０）　ニチ-ヌ　アティ，フィーク　ナトーン。
熱-主格　あって　寒く　　なっている
「熱があって，さむけがする。」

この事実は，依存格理論による分析では当然の帰結である。（１０）の最初の節である「ニチヌ　アティ」の

中には名詞句は「ニチ」（熱）ひとつしかなく，この節の TP がスペルアウトされる時点で，（６）により，「ニチ」には主格の「ヌ」が付与されることになる。一方，定形節の時制辞によって主格が与えられるとする，いわゆる「一致による格付与理論」にとっては，この事実は問題である。なぜなら，「ニチ」は非定形節の中にあり，主格を与えてくれるはずの機能範疇が存在しないからである。日本語についても同様の問題が存在することは，竹沢（1998: 97）が（１１）の例を示して指摘している通りである。

（１１）雨が激しく，風が強い（こと）

日本語の主格の「ガ」に関して，青柳（2006）はデフォルト格であるとする分析を提示しているが，この分析だと（１１）は問題なく説明できる。

5. 目的節に現れる有標主格

最後に, 沖縄語の目的節の末尾に現れる「ガ」も有標主格である可能性についても触れておきたい。（１２），（１３）の［　］でくくった目的節は，動詞の連用形に主格の「ガ」がついた形をしている。

（１２）［ イユ チー-ガ ］ イチュン。
魚　釣り-主格　行く
「魚を釣りに行く。」

（１３）［ アシビー-ガ ］イチュン。
遊び-主格　　行く
「遊びに行く。」

日本語の目的節では動詞の連用形に「ニ」がつくことと対照的である。Baker (2015: 221)は，付加詞も依存格付与に関与するとし，（１４）の一般化を提案している。

（１４）Adjuncts can undergo dependent case assignment, but they cannot trigger it.

沖縄語の動詞の連用形は, 日本語の連用形同様, 名詞的な性質を持っていることからすると,（１２),（１３）の連用形を主要部とする付加詞節が,（１４）の一般化から予測されるように依存格を付与されるという分析も可能であろう。

6. 終わりに

本稿では，生成文法理論の代表的格付与分析の１つで，最近脚光を浴びてきている依存格理論の枠組みを使用し，沖縄語の形態格の分布がどのように説明されるかについて考察した。分析した例文は極く単純な例文ばかりであるが，依存格理論による分析の有効性はある程度示せたのではないかと思う。もちろん，格にまつわる事実は複雑で，ここで提示した分析を出発点として，様々な構文における沖縄語の形態格に関する分析を進めていく必要がある。今後の課題としたい。

参照文献

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房.

Baker, Mark (2015) *Case: Its principles and its parameters*. Cambridge: Cambridge University Press.

Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language,* 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Comrie, Bernard (2005) Alignment of case marking of full noun phrases. In: Martin Haspelmath, Matthew Dryer, David Gil and Bernard Comrie (eds.) *The world atlas of language structures*, 398-403. New York: Oxford University Press.

加賀信広（2017）「日本語ニ受動文における受影性の起源～意味役割理論と格配列理論からの帰結～」*Papers from the thirty-fourth conference November 12-13, 2016 and from the ninth International Spring Forum April 23-24, 2016 of the English Linguistic Society of Japan*; *JELS* 34: 56-62.

König, Christa (2009) Case and the typology of transitivity. In Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.), *The Oxford handbook of case*, 535-548. New York: Oxford University Press.

Marantz, Alec (1991) Case and licensing. Paper presented at *The 8th Eastern States Conference on Linguistics*, University of Maryland.

宮良信詳（2000）『うちなーぐち講座：首里ことばのしくみ』那覇：沖縄タイムス社.

Shimoji, Michinori (2012) Northern Ryukyuan. In: Nicolas Tranter (ed.) *The Languages of Japan and Korea*, 351-380. Oxon: Routledge.

竹沢幸一（1998）「格の役割と構造」中右実（編）竹沢幸一・John Whitman（著）『格と語順と統語構造』1-102. 東京：研究社出版.

内間直仁（2011）『琉球方言とウチ・ソト意識』東京：研究者.

内間直仁・野原三義（編著）（2006）『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』東京：研究社.